

平成 21年 5月 21日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730356
 研究課題名（和文） 発展途上国における貧困の世代的再生産と教育に関する調査研究
 研究課題名（英文） Intergenerational transmission of poverty and school education in developing countries
 研究代表者
 佐々木 宏（SASAKI HIROSHI）
 広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
 研究者番号：50322780

研究成果の概要：本研究の目的は発展途上国における貧困の世代的再生産と教育の関係性を明らかにすることである。そのために、北インドの地方都市において各社会階層に属する若者から生活史を聞き取り、それらを事例的に比較分析するという方法をとった。その結果、貧困家族の教育を通じた階層上昇への期待は高いが、貧困家族の子どもが教育を通じて階層上昇することは容易ではないことが明らかになった。また、その困難の背景には、家族の貧困はもちろんのこと、その不利を助長する社会環境があることも明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：貧困と教育 途上国 インド

1. 研究開始当初の背景

研究代表者(佐々木)は1996年からインド・ウッタルプラデシュ州A市において児童労働と義務教育の中退問題をめぐるフィールドをすすめてきたが、そのなかで、貧困の世代的再生産の問題の深刻さを目の当たりにしてきた。

「貧困の世代的再生産」とは、貧しい家族で生まれ育つ子どもが、貧しさという不利のため、貧しい家族を形成する大人になる傾向のことを意味し、その対極には「富裕の世代的再生産」があり、社会階層・階級の再生産、

世代を超えた社会階層の固定的な関係性と言い換えてもよい。

研究開始当初の関連する学会を見渡すと、発展途上国に貧困の世代的再生産の問題があること、それ自体はよく知られていた。しかし、発展途上国の貧困問題は、長らく飢餓に象徴されるような絶対的な欠乏の問題として理解されることが多く、相対的な格差(階層間の不平等)を問題にする貧困の世代的再生産の問題についてはそれほど豊富な研究があったわけではない。

研究開始当初は、発展途上国の貧困の世代的再生産の問題については、問題の重要性が

提起されていた段階で、実証は萌芽的な研究がいくつかあるにすぎなかった。

このような状況をふまえて、研究代表者が長らくフィールドワークをすすめていたインド・ウッタラプラデシュ州 A 市を対象に、発展途上国の貧困の世代的再生産の実証研究を企画した。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、インド・ウッタラプラデシュ州 A 市における貧困の世代的再生産の現状とその規定要因を明らかにすることであるが、より具体的には以下のような研究目的を設定した。

(1) 貧困の世代的再生産と学校教育の連関を分析すること

本研究では、貧困の世代的再生産の構造一般というより、学校教育を通じた貧困の世代的再生産に焦点をあてて、現状とその規定要因を明らかにすることを目的とした。

学校教育に焦点をあてた理由は、それが貧困の世代的再生産を規定する大きなファクターの一つであると考えられるためである。

学歴社会を前提にすれば、子どもが受ける教育の量や質は、将来の「成功」「不成功」の見込みに関わる重要な条件となる。また、子育てのかなりの部分の責任と負担が家族に委ねられているという条件のもとでは、当然、子どもが受ける教育の量と質は生まれ育つ家族の資源に対応することになる。

これらのことをふまえれば、教育は一般に貧困の世代的再生産のモメントの鍵を握る条件であるといえる。

(2) 社会環境が貧困の世代的再生産に及ぼしている影響に着目すること

本研究では、貧困の世代的再生産を分析するにあたって、一般的な分析枠組みとはやや異なる枠組みを用意した。

貧困の世代的再生産の分析は一般に、個々の家族の持てる資源の多寡と子どもの成長後の社会経済的状況を計測し、両者の関係性(相関や因果関係)を検証するという枠組みとしてすすめられる。本研究でも当然、世代間の資源の関係性にも関心を払っているが、このような実証モデルからのアプローチには限界があると考え、新しい枠組みを採用した。

それは、家族の階層的位置の世代的継承が行われる場・文脈(社会環境)を織り込んだ枠組みである。いうまでもなく、貧困の世代的再生産は「真空」のなかではなく、特定の場の上で行われている。社会環境とは、国家による制度を含む社会構造全体のことを指す

が、たとえば税制や学校教育制度のあり方一つとってみても、それが貧困の世代的再生産に大きな影響を与えていることは容易に想像できる。従来の実証モデルは、社会環境という条件を所与のものとしていたという問題があった。そこで本研究では、インド・ウッタラプラデシュ州 A 市という特定の社会環境が貧困の世代的再生産に与えている影響に着目した。

3. 研究の方法

(1) 子どもの育ちの事例分析

研究は、A 市において様々な社会階層に属する家族における子どもの育ちのプロセスを事例的に比較分析するという方法をとった。

研究を計画した時点では、富裕層、庶民層、貧困層という三つのカテゴリーから、20 歳前後の若者がいる家族を二家族ずつ抽出し、親と若者から、それぞれ子育て史と生活史を聞き取り子どもの育ちのプロセスを把握することをねらっていた。

しかし、調査を始めると親からの聞き取りが困難な事例が少なからずあったため、親からの聞き取りが困難であっても、少なくとも若者自身からだけでも生活史を聞き取れる事例を増やして対応した。2 年間で三つの階層に属する 17 家族(17 人の若者)を事例として捕捉した。

(2) 聞き取り項目

— 家族の社会経済的状況

所得、資産、家族構成、家族構成員の学歴と職業など

— 若者の生活史と親の子育て史

就学前から現在に至るまでの学校歴、生活史や子育て史における様々なイベント(進学、中退、学校選択)とその際の若者本人と親の行動と意思

— 若者の現在の状況と将来展望

現在の状況、若者自身と親が考える将来の展望とその展望に関わる行動

4. 研究成果

親調査の欠損が多かったため、若者から聞き取った生活史データを中心的に分析した。親から得た情報は、若者から聞き取った生活史の補足情報として利用した。

(1) 事例

調査事例から聞き取られた生活史情報は膨大な量があり、ここですべて示すことはできないので、学校歴、現在の状況のみ紹介しておく。

各事例の中等教育までの学校歴は、就学前から中等教育修了まで一貫して英語を教授語とする私立学校に通っていた事例については<英語ボード>、中等教育修了まで現地語(ヒンディ語)を教授語とする公私立学校に通っていた事例を<UP ボード>、早期に(義務教育修了かその前)に学校を離れた事例を<早期中退>と呼ぶ。

なお、各事例の名前はすべて仮名である。女性事例が2例あるがそれらには<女性>と記した。他すべては男性事例である。

豊かな家族の若者

①モナ <女性>

- ・英語ボード
- ・A市の大学を卒業後、しばらく働き、その後MBA(大学院経営学修士コース)に進学。MBA修了後、結婚し現在は働いていない。

②カイラーシュ

- ・英語ボード
- ・A市の大学を卒業後、MBAに進学し修了後、金融機関で働いている。

③アシュワニ

- ・英語ボード
- ・A市の大学を卒業後、海外留学を目指し予備校に通うが、諦め、現在は他州で働いている。

④ジョン

- ・英語ボード
- ・中等教育修了後、名門工科大学をねらって予備校に通う。その後、合格し現在は他州の名門工科大学に通っている。

⑤アルン

- ・英語ボード
- ・他州の大学を卒業後、A市でMBA進学のための予備校に通い、その後MBAを修了した。現在は自分でビジネスを始めている。

⑥ラフル

- ・英語ボード
- ・A市の大学を卒業後、MBA進学のための予備校に通う。MBA修了後、金融機関で働いている。

庶民家族の若者

⑦アショーク

- ・UPボード
- ・A市の大学を卒業後、アルバイトをしながら公務員試験の準備をしていた。現在は、公務員試験を諦め、知り合いの仕事を手伝っている。

⑧プラカーシュ

- ・UPボード
- ・A市の大学を卒業後、民間のコンピュータ学校のインストラクターとして働く。現在は独立し自らコンピュータ学校を経営している。

⑨スレーシュ

- ・UPボード
- ・A市の大学を卒業後、アルバイトをしながら公務員試験の準備をしている。現在に至るまで何度も受験をしているが、すべて不合格で、現在も公務員試験を目指している。

⑩サンジープ

- ・UPボード
- ・A市の大学を卒業後、MBA進学を目指して予備校に通う。MBA修了後、保険会社で働いている。

⑪アブドゥル

- ・UPボード
- ・A市の大学を一旦卒業後、再び別の学部に入學し、現在も通学している。

貧しい家族の若者

⑫シャーム

- ・UPボード
- ・A市の大学の最終学年に在籍中。隣州の公務員試験に合格し、近く公立学校の教師になることが内定していた。

⑬アニール

- ・早期中退
- ・学校を中退した後、サリー工場の職人として働いた後、トラックドライバーに転職し、現在に至る。

⑭プラタープ

- ・早期中退
- ・学校を中退した後、ビターイー(サリー織に使う飾糸)作りの工房で働いている。

⑮サンギータ <女性>

- ・早期中退
- ・学校を中退した後、家事と家業の手伝いをしている。

⑯サンジャエ

- ・早期中退
- ・学校を中退した後、ビターイー(サリー織に使う飾糸)作りの工房で働いている。

⑰ビジャエ

- ・早期中退
- ・学校を中退した後、家業のパーン(かみタバコ)屋台で働いている。何度か復学を試みたが叶っていない。

(2)分析結果

三つのカテゴリーに属する17事例を比較検討した結果、以下の三点が明らかになった。

①学校歴の多様性と階層性

17 事例の中等教育までの学校歴はきわめて多様であった。A 市には数多くの公私立学校が存在し、初等教育の段階から基本的に親の学校選択は放任されているのだが、調査では多くの子どもが転校を繰り返していることが明らかになった。また、他州や UP 州の農村部から子ども 1 人で転校してくる事例(②⑩)も少なからずあり、遠距離の転校経験者には貧困家族の子どもも含まれている。最もよくみられた転校の動機は「より良い教育を受けるため」であった。このことは、現代のインドの地方都市においては貧困層も含めた各層で教育要求が高いことを示している。

ただし、学校歴の多様性は、基本的に階層性をもっていることも同時に明らかとなっている。庶民層や貧困層の若者のなかに＜英語ボード＞経験者は皆無であり、＜英語ボード＞と＜UP ボード＞の間には大きな溝があるといわざるとえない。

また、＜早期中退＞者の現況からは、A 市には早期に学校を離れた子どもが働くための受け皿(サリ生産のような伝統的手工業や都市的な雑業)があるといえる。

②貧困層の教育を通じた階層上昇の困難性

若者の生活史からは、高い教育要求をもつ庶民層や貧困層の家族の期待は、必ずしも満たされていないことが明らかになった。

＜英語ボード＞を経験した豊かな家族の若者が就いている職業(銀行や保険会社の仕事)に参入する条件は、MBA のような高い学歴を持っていること、英語に堪能であることであるが、庶民層や貧困層の若者たちの生活史をみるとその条件を満たすことのできる学歴を彼らは経験していない。このことは、庶民層でも＜英語ボード＞経験者が皆無であることに顕れている。

尤も、事例⑩のように、＜UP ボード＞経験者であっても予備校に通い MBA に進学し、その後、保険会社で働いている事例もある。ただ、事例⑩は聞き取りのなかで繰り返し自らが＜英語ボード＞を経験していないことの不利を語り、またそれを埋めるために家族からのサポートを受け猛勉強を実践していた。このことは、＜UP ボード＞出身者が、豊かな家族の若者たちとの競争に伍していくことはそうたやすく示している。

＜UP ボード＞で高等教育まで進学した若者たちが就いている仕事の状況を見ると、収入面では＜早期中退＞者とさほど変わらない状況にあることも明らかになった。これは大卒後公務員以外の仕事をしている、たとえば事例⑦⑧⑨と＜早期中退＞者の稼動収入

を比較した結果である。また、事例⑨が苦勞しているように、A 市では公務員は狭き門である。このことは、＜UP ボード＞を経験し、A 市の大学を卒業することは、公務員にならなければあまり大きなメリットがないことを意味している。貧しい家族の子どもにとって＜UP ボード＞を通じて高等教育に至ることは不可能ではないのだが、そのことは階層上昇を念頭におくと十分なチャンスにはならない可能性が高いといえる。

③教育を通じた階層上昇の困難性の背景にあるもの

結局、＜英語ボード＞を経験し、MBA のような高学歴に至る道、換言すれば教育を通じて成功に至る経路は、基本的に、豊かな家族の子どもだけに開かれているといえる。この背景には、むろん、＜英語ボード＞や MBA を経験するための費用負担ができるか否かという家族の階層的な位置付けがあるのだが、若者の生活史の事例分析からは、本研究で着目した社会環境の強い影響が伺えた。

大きくは、教授語により複線化した教育制度とその選択を放任している教育行政、また＜UP ボード＞出身者に、学歴に見合った仕事を提供できない労働市場といった、A 市の教育制度と労働市場のありようが、貧困層の教育を通じた階層上昇を困難にしている。

また、生活史聞き取りでは、奨学金制度や授業料免除制度の利用状況も聞き取ったが、量的あるいは質的な側面で不備が多く、若者たちの不利を補填するように有効に機能していないことも明らかになっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①佐々木宏, 途上国における貧困と教育—インド UP 州 A 市の若者聞き取り調査から, 環境科学研究, 査読有, 第 2 巻, 2007, 43-66

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 1 件)

①浅井春夫 松本伊智朗 湯澤直美 実方伸子 川松亮 横田千代子 山田勝美 岩田美香 池谷秀登 鳥山まどか 小西佑馬 佐々木宏, 明石書店, 子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために, 2008, 302-327

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 宏 (SASAKI HIROSHI)
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：50322780

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者